

『カトリック教育研究』第3号・抜刷

(1986年7月)

聖書的アプローチの自尊感情に及ぼす影響

——私立看護短大生の質問紙による因子分析——

聖母女子短期大学 和田 サヨ子

聖路加看護大学 高木 廣文

聖書的アプローチの自尊感情に及ぼす影響

——私立看護短大生の質問紙による因子分析——

和田 サヨ子
高 木 廣 文

I はじめに

聖母女子短期大学（東京都新宿区）の教育理念の本質は、キリストの福音である。キリストの教え、すなわち聖書を通じて学ぶ人生観を土台として、看護教育を行っている。

すなわち、学生の可能性を助長し学問技術の修得を通して、真理を探究させる。特に女性のまことの使命の認識・自覚によって、生命にかかわる専門職業を遂行できるように備えることにある。また専門職業人として、有能な指導者として、人々の福祉に奉仕できるように、知情意の調和のとれた全人的人間形成の基礎づくりを目指している。

このような教育理念をカリキュラムの中に展開し、実践する一方策として、聖書的アプローチを学習環境として設定した。この場合の聖書的アプローチとは、聖書を用いて知情意の統合体である全人間教育を試みることによって、将来看護の専門職を身につけた女性、そして平和な家庭・社会づくりに貢献できる基礎を形成することである。

具体的には、学校生活・寮生活を通しての朝夕の祈りと、カリキュラムの上でのキリスト教概論、人間論、聖書研究、黙想会による体験学習その他の行事によるアプローチである。

基本的な人間のニードに集点を当てた看護論で、日本にも大きな影響を与えたヘンダーソン (Virginia Henderson 1897～) は、看護婦の役割について次のように述べている。「あるときは、意識を失っている人の意識となり、自ら生命を断とうとした者に代わっては、生命の熱愛者として立ち、足を切断された人の足として、また光を失ったばかりの盲人の目として……云々⁽¹⁾」と。

ヘンダーソンは、看護婦を「欠けたところのない手」として表現し、「苦しんでいる人を助けずにはいられない情緒」が生きていてこそ具現されるのが看護であると述べている。そして、初期キリスト教時代以来の看護の根底にある哲学、「よきサマリヤ人として人々に接し、決して向こう側を通らない」態度が現代の看護にも存在しなければならないという信念を示している。⁽²⁾

善きサマリヤ人のたとえ話

イエズスはこれに答えて次のように仰せになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗に襲われた。彼らはその人の着物をはぎ取り、打ちのめし、半殺しにしたまま行ってしまった。すると1人の祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見て、道の向こうがわを通って行った。また同じく1人のレビびとが、そこを通りかかったが、その人を見ると、レビびとも道の向

こうがわを通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人が、その人のそばまで来て、その人を見て哀れに思い、近寄って傷口に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をしてやった。それから、自分のろばに乗せて宿屋に連れて行き、介抱した。その翌日、サマリア人は、デナリ2枚を取り出して、宿屋の主人に渡し、『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰って来たときに支払います』と言った。さてあなたはこの三人のうち、だれが、強盗に襲われた人に対して、隣人としてふるまったと思うか。」律法の専門家が、「あわれみをほどこした人です」と言うと、イエズスは、「では、⁽³⁾あなたも行って、同じようにしなさい」と仰せになった。

また看護の組織化をはかり、偉大な業績を残したフローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale 1820～1910) は、看護実践にたずさわるためには、その前に正式な教育が必要であるという考えを確立した。宗教的確信にうらづけられた病人のケアに関する彼女の接近法は、『看護の覚え書』(Notes on Nursing) ⁽⁴⁾ によくあらわされ、今日行われている看護ケアの基礎的論拠を与えるものである。彼女は『看護覚え書』の中の看護婦とは何かの章で、次のように述べている。「この世の中にこれほど散文的どころかその正反対のもの、すなわち自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する力をこれほど必要とする仕事はほかに存在しないのである」⁽⁵⁾と。

以上のような看護の本質的理由で、聖書的アプローチが、実習を中心とした看護学生の体験学習におよぼす影響は、特に情意領域の側面で大きいと推測される。

パーソナリティ理論に強い影響を与えたロージャーズ (Carl Ransom Rogers 1902～) によれば、感情や体験が自己概念に矛盾する場合、環境に対する否認が生じるとされる。このことから看護学生に関しても、学習環境の受容について、自己概念が、重要な意味をもつものと考えられる。⁽⁶⁾

また、自尊感情は自己概念の重要な部分を占め、自分を価値あるものととらえる人は、肯定的な自己概念をもち、環境への適応が容易であると仮定できよう。そこで本学の看護学生の情意領域に対する聖書的アプローチが、その自尊感情にどのように影響を及ぼしているかを調査してみた。

以下まず、この調査の目的、対象、方法を簡単に紹介し、次にその結果とそれに基づく私達の考察とを述べる。

II 調査の概要

本調査では、学習環境としての聖書的アプローチが、学生の自尊感情にどのように関与しているか、学習環境の受容に関する因子を探索することを目的とした。

その対象と方法は次のようであった。本学の全寮制による3年制看護短大生1年生40名、2年生38名、3年生37名、合計115名を対象とし、昭和59年7月(夏休み前)昭和60年3月(学期末)の2回にわたって、質問紙による調査を行った。なお回収率は、100%であった(表一)。⁽⁷⁾

質問紙には、遠藤ら(1974)の自尊感情尺度項目を参考にし、46項目を設定した。そのうち、自尊感情に関する質問項目1～23、教師や友人との対人関係、看護職への認識等に関する項目24～33、学校および寮生活における聖書的アプローチに対する反応についての項目34～46に分類した(資料一1)(以下Q1～Q46とする)。

表一 調査時期別学年別対象者数

時期 学年	7 月	3 月
1 年	40	40
2 年	38	37
3 年	36	37

各項目の選択肢は、「はい」、「どちらともいえない」もしくは「ときどき」、「いいえ」の3段階とし、それぞれ3, 2, 1の各得点を与えた。

分析は、まず項目間の相関係数を求め、因子分析（バリマックス法⁽⁸⁾）を行い、さらに抽出した因子の因子得点を求め、各学年間での差を調べるために、分散分析を行った⁽⁹⁾。

カリキュラムにおける聖書的アプローチを学習目標に則してまとめると、次の通りである。

1 人間学として学ぶ哲学的思考（看護学総論・年間40時間、人間論・年間30時間）

看護の対象である人間を統合体として理解するために、たんに身体（からだ）だけではなく、靈魂、精神、人格が本来不可分に融合している統合体としての人間にアプローチすることを、哲学的人間学の見地も加えて考察する。

2 宗教学（キリスト教概論、1年・2年前期、合計45時間）

人間が生きていく際に不可欠である信仰についてキリスト教の立場から、新約聖書をテキストとして、病、癒し、生命への畏敬というテーマのもとに学び、看護活動の本質を考える。

3 体験学習

(1) 合宿（黙想会と呼ぶ）

情操教育として、看護婦としての人間性すなわち、共感、受容、あたたかさ、客観性を学生が身につける。合宿による集中的対人関係を通して、自己と正面から出会い、受容し、自己確立によって肯定的に人生を歩む希望を見出すことを目的としている。

(2) 学校および寮生活を通してのアプローチ

朝夕聖書を朗読し、考察した上で生活の指針とする。看護行動に対する動機づけ、すなわち、他者の立場に立って感じたり、考え、思いやって行動できるよう方向づける。

こうして自己確認ができ、自己の受容ができると、対人関係を主軸とする看護職への受容、学習の意欲が高められる。それはまた、女子学生を対象に、将来、社会における専門職業人として、妻として、あるいは、母親としての役割を理解し、実践できる可能性を育成する。

そこで聖書の教えを土台にした看護教育（学内における知識、技術の習得、全寮制による共同生活での人間関係の体験学習、臨床実習による新しい生命の誕生や、病める者、苦しむ者との出会いのうちに育てられる）、すなわち、生から死への人生の体験による自己概念の確立と人生観、看護観の確立をめざしているのである。

III 調査の結果

1 時期別学年のクロス集計⁹⁾

年度の7月と3月に3つの学年に実施したものをクロス集計した（質問文は後掲の〔資料1〕を参照）。

その結果、まず月において、学年間で有意差のみられた項目は、対人関係Q 9, 19, 22, 看護職への認識Q26, 31, 32, 聖書的アプローチに対する反応Q34～42であった。

Q 9, 19, 22の対人関係に関するものは、1年生が高くなっている。Q26の自己学習活動に関しては実習が複雑になるにつれて、つまり、3年生が否定的な反応を示している。病院という環境での知識と技術の統合の困難による自信喪失、勉強不足等の原因で、実習が進むにつれて、看護職への誇りが低下している。Q29の自己学習活動の課題の負担も考えられるが、ひとつは、実習に対する動機づけのマン

ネリ化も一因のように思われる。臨床実習指導における教師の役割は、病人と学生の出会いを助けることにある。この目的が達成されるための教師1人当たりの学生の担当人数は、5～6名位と思われる。

現状では、教師1人当たりの担当学生数が10数人に及ぶ実習時期もある。この背景には、実習病院の病棟数が少なく、病床数は約190床で、学生数（常時約120名）と比べ大差なく、実習ローテーションに苦慮している実状がある。今後、カリキュラムや臨床実習指導方法については、研究課題である。

一方、3月における3学年のクロス集計では、対人関係に関するQ1、6、10、14、16、看護職への認識に関するものQ25、31、聖書的アプローチに対する反応Q46の項目に、学年間で有意差がみられた。Q1、6、10、14、16の対人関係における項目では、3年生になるにつれ、友人関係との適応状況がみられる。学校生活3年間の中で教師とのコミュニケーションも、Q31にみられるように、3年生は安定している。

聖書による人間像と自己像との不一致による葛藤で悩む(Q46)のは、1年と2年の得点が高い。3年生の悩みは、聖書に対する否定的反応によるより、自己受容のあり方および、動機づけが1年生・2年生に比べ欠如していること等によるものと思われる。また見方を変えれば、Q35～Q41の聖書を中心とした項目に対する3年生の「いいえ」という反応は、31.0～26.4%の枠内で一定している。「はい」「ときどき」を含めて大半の学生にとっては何らかの動機づけになっていると考えられる。それは後述するように、バリマックス法による第1因子、第4因子においても裏づけられている。今後も実習形態をカリキュラムに取り入れていく方針からすれば、1年次での朝礼における聖書朗読と看護との関連性について、濃厚な動機づけを行うことが、重要であると結論づけられる。

2 バリマックス法による因子分析

46項目の質問に対する回答から、以下に示すような10項目の共通因子が抽出された。各因子のもつ意味を明確にするために、因子負荷量0.3以上の値をもつ項目によるものである。⁽⁴⁾すなわち、各項目の反応得点と、仮想される潜在因子得点との相関係数に相当するもので、この値が大きいほど、その因子の効果が大きいことになる⁽⁴⁾。

第1因子は、聖書のみことばは看護職に対する誇りを増す(Q35)、聖書は感謝の念を増す(Q34)等、負荷量の大きいものから、Q41、38、36、40、42、39、27などの項目より成り、《聖書による看護職への誇りに関する因子》であると思われる。

第2因子は、他の人にどのように思われているか気になる(Q23)、他の人とうまくやれるか気になる(Q9)等、Q10、22、19、11、12、21、15、17による、《他者の評価に対する関心や不安の因子》と思われる。

第3因子は、初対面の人と話すのがむずかしい(Q18)、人との話題について困る(Q16)等、Q13、12、11、21、20による《他者との会話やコミュニケーションに対する不安に関する因子》と考えられる。

第4因子は、聖書のみことばによって不安になる(Q43)、聖書と自己像との不一致で葛藤する(Q46)の項目が上位を占め、《聖書の内容と自己の不一致に対する不安に関する因子》と考えられる。

第5因子は、先生とのコミュニケーションを持っている(Q28)、先生とのコミュニケーションに満足する(Q27)の項目が上位を占め、《教師とのコミュニケーションに関する因子》と考えられる。

第6因子は、病院実習は好きである(Q25)、看護という職業は自分を生かすものである(Q24)等の

項目が上位を占め、《看護職への誇り、適応に関する因子》と考えられる。

第7因子は、人前でのゲームやスポーツはまごつく（Q14）、他の人にどう思われているか気になる（Q15）といった項目が上位を占め、《低い自尊心に関する因子》と考えられる。

第8因子は、自分は他者に比べて劣っている（Q1）、うまくやれることなど全然ないという気持ちになる（Q8）等、《劣等感に関する因子》と考えられる。

第9因子は、何が価値あるものか疑いを覚える（Q5）、自己嫌悪を覚える（Q6）項目が上位を占め、《自己嫌悪に関する因子》と考えられる。

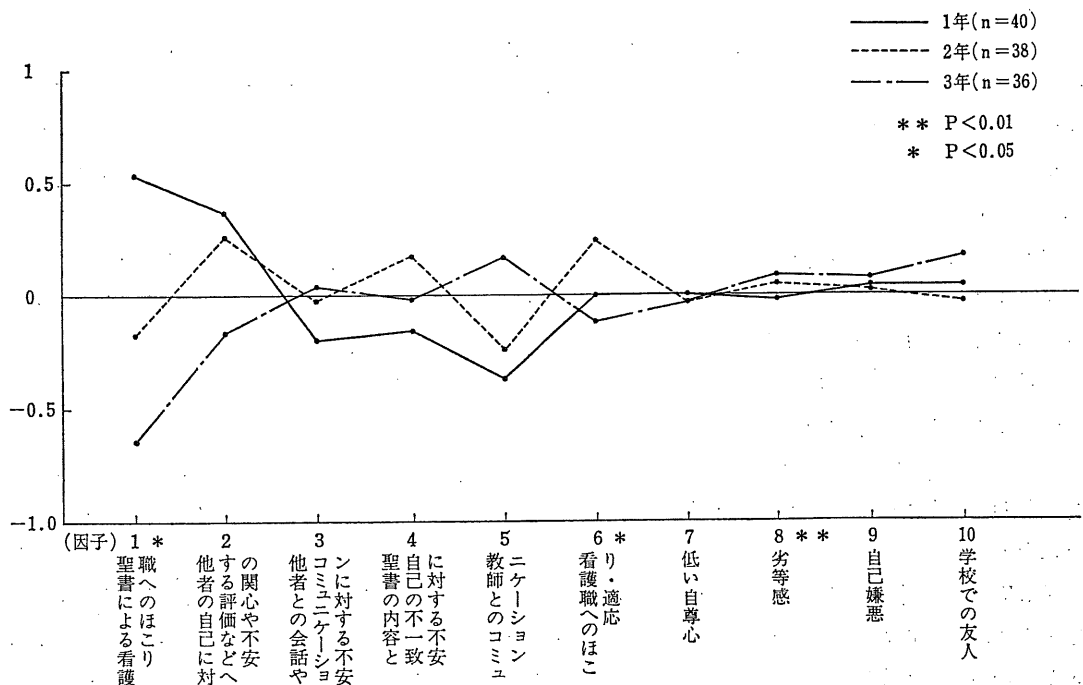
第10因子は、友人関係に満足している（Q29）、相談できる友人がいる（Q30）等、《学校での友人に関する因子》と考えられる。

3 因子得点の学年別、調査時期別の分散分析

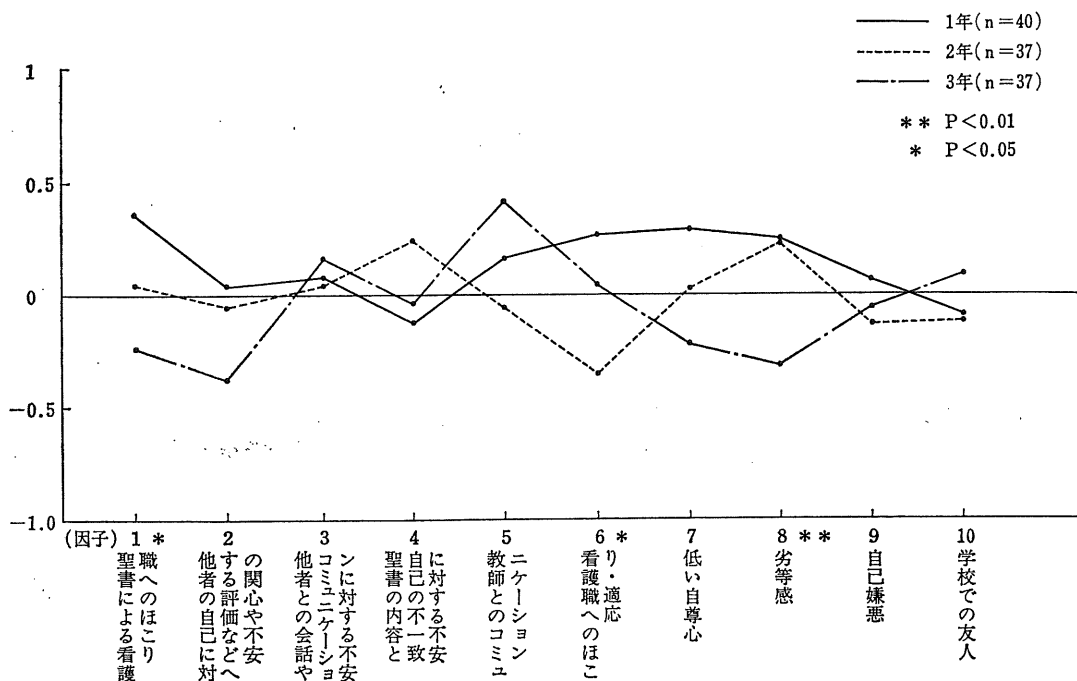
各学年また同学年による7月と3月の各因子構造の違いを調べるために、因子得点を求め分散分析を行った。このうち、調査時期による因子得点の平均値を学年毎に算出した結果を、図一1（7月のデータ）図一2（3月のデータ）に示した。

(1) 調査時期による因子得点の変化

まず1年生については、第5因子《教師とのコミュニケーション》において、7月と3月の間に有意差（1%水準）が認められた。1年生は、入学して3か月目の7月よりも、11か月を経過した3月の方が、教師とのコミュニケーションが密にとれている傾向がある。また第8因子《劣等感》において、7月よりも3月の方が、劣等感が強まる傾向が認められ、その差は有意（5%水準）であった。



図一1 因子得点の平均値（7月のデータ）



図一2 因子得点の平均値（3月のデータ）

次に2年生については、第6因子《看護職への適応》において、7月と3月の間に有意差（5%水準）が認められた。2年生は、7月よりも3月の方が《看護職への適応》が低くなる傾向が見出せる。これは、4年制の私立看護大学生の調査による結果と類似している。⁽¹⁴⁾ また3年制看護学校や3年制看護短期大学の2年生の時期に、小島、坂口が行った調査でも同様の結果が示され、その他の調査結果とも類似している。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾ このように他の調査結果と類似していることも考えあわせると、2年生は学習環境が講義から病院中心になるの中でたどる時期である、と推測される。また、これらの背景としては、実習場での緊張、講義と実践の統合、実習記録提出に関する課題等による、学生のストレス状況も考えられる。⁽¹⁶⁾ 伊藤の調査では、カリキュラムが過密で時間的なゆとりがないと考えている看護学生が約4分の3おり、カリキュラムに関する検討も今後の課題である。

最後に3年生については、調査時期により有意差の認められた因子はなかった。

(2) 学年による因子得点の変化（図一1、図一2）

第1因子《聖書による看護職へのほこり》において、7月（1%水準）、3月（5%水準）の両方で各学年間に有意差が認められた。7月、3月とも、平均値は1年生が最高であり、2年生3年生と高学年になるほど、聖書による看護職への誇りは低下している。

第2因子《他者の自己に対する評価への関心や不安》において、7月に各学年有意差（5%水準）が認められた。平均値は、1年生が最高であり、2年生、3年生と高学年になるほど、他者の自己に対する評価への関心や不安は低下している。これは、前述のように、1年生が看護職に対する自分の適性とそれに対する教師の評価に関心をもち、寮生活での新しい友人関係等に緊張することによると思われる。

第6因子《看護職への適応》については、3月の調査で各学年間に有意差（5％水準）が認められた。平均値は、1年生が最高であり、2年生が最低だった。2年生の看護職への適応が最も低いことが認められたことは、調査時期別の分散分析の2年生の結果と類似している。

第8因子《劣等感》において、3月に各学年間で有意差（1％水準）が認められた。平均値は、1年生が最高であり、2年生、3年生と高学年になるほど、劣等感が減少することが認められた。第5因子《教師とのコミュニケーション》については、有意差はなかったが、調査時期が7月の場合、高学年になるほどコミュニケーションが密になる傾向が見られる。

IV 調査結果に基づく考察

以上、調査結果の概略を述べてきたが、ここで本学における学習環境としての聖書的アプローチの、学生に及ぼす影響を総括的に考察してみたい。

エリクソン (Erik H. Erikson 1902～) は、人間を身体的、精神的、社会的、文化的歴史的な存在としてとらえ、その統合主体として自我を重視し、さらに、そのような自我の発見が、社会の歴史的文化的基盤や人間関係の中で展開していく点を強調した。

人間関係の中での発達を意図して、全寮制による一貫教育を実施している本学において、聖書的アプローチは、発達課題を解決して行く道しるべとして役立つようにと意図されている。すなわち、この課題解決の過程において生命の尊厳、人間の尊重の意義を見出し、正しい自己愛に目ざめ、他人を愛することを学ぶことによって、人間を対象とする看護職の価値、尊さを認識することができる。そして看護職に召された使命感を自覚し、看護職を身につける喜び、誇りをもつことへと発展して行くのである。このためには、聖書が宗教教育の中で単に理論や教義を伝達するだけのものとなってはならない。日夜聖書を聴くことにより、日常生活に体験的に結びつく分ち合いが教師によって意図的に導かれることが大切である。

看護とは、キリストの代理者として、キリストの治療を続けることであり、キリストによって病人が癒され慰められることである。学生は、学校、寮、臨床とあらゆる場で出会う人々とのかかわりの中で神の愛を体験的に受容できるように導かれて行く。

本学では、学生を看護職の使命へと動機づけることに、カリキュラムの中で重要な位置づけを与えている。ナイチンゲールは、熱意と使命感に基づいた観察こそ、看護婦教育における重要な基本的要素としている。以下その部分を著書『看護覚え書』から引用したい。

何かについて《使命感》を抱くとはどういうことであろうか？それは何が《正しく》何が《最善》であるかというあなた自身の高い理念を満足させるために仕事をするのであり、もしその仕事をしていないでいたら「指摘される」からするのではない、ということではなかろうか。——とすると看護婦は……(中略)……人間にその熱意を注がねばならないのである。もし看護婦が自分自身の満足を求めて病人の世話をするのではないとしたら、いくら《いっても》彼女に熱意をもって仕事させることはできないであろう。——そうした「使命感」をもつ看護婦は、自分の受け持つ患者用にと手渡された薬びんを全部調べ、においをかぎ、気になれば味わってもみる。999回までは間違いはないであろうがちょうど1000回目に看護婦のこの方法によって重大な間違いが発見される可能性もある。しかし、もし看護婦が彼女自身を満足させるために行うのであれば、いってやらせようとしてもむだ

なのである。それは、きつとなんらの目的意識もなくにおいをかいだり味をみたりするであろうからである。

また、使命感をもっていない看護婦については、「こんな看護婦は自分の患者が目覚ましているのか眠っているのかも決して知ってはいない。『何かしてほしくないか』と尋ねるために、眠っている患者を起こしたり、患者が目覚めているときに何の世話もしないで放っておいたりする」と述べている。

今回の調査では、バリマックス法による因子分析の結果、第1因子《聖書を通じての看護職への誇り》の因子負荷量が大きかった。本学学生に対する聖書によるアプローチの効果の大きいことが推測される。すなわち学生の日常生活行動や寮生活、また、看護職に対する自信と誇り、使命感等、学生の自尊感情に対するこのアプローチの影響が、肯定的反応結果となってあらわれていると思われる。これは寮生活、実習、行事、講義等を通して、教師と学生の相互作用による全人的かわり合いによるものと考えられるのである。そして聖書的アプローチは、看護婦役割に必要な「苦しんでいる人を助けずにはいられない情緒」への動機づけになっていると思われる。

第2因子《他者の自己に対する評価などへの関心や不安》、第7因子《低い自尊心》、第8因子《劣等感》については、いずれも7月に比べ3月が低くなっている。また学年が進むにつれて、第2、7、8因子の低くなる傾向にあり、3年生においては、自己受容がなされていると推測される。有意差の見られた第8因子《劣等感》において、1年生や2年生よりも3年生は、肯定的自己観が形成されているようである。

エリクソンがいう青年期の課題であるアイデンティティとは、自分が自分自身であるという意識である。聖書的アプローチによって、自分の生の意義、自分の存在価値、肯定的自己観が確立され、青年期のアイデンティティクライシスから救われることは、意義あることと考える。

第9因子《自己嫌悪》においては、3学年とも7月、3月いずれも大差ない。しかしこの自己嫌悪体験は傷つく体験でもあり、人間の生の体験において必然的なものである。したがって教師には、学生の傷ついた体験が癒し主イエズス・キリストとの出会いにつながり、人間が神の愛に値する価値を持っているという体験につながるように指導する、重大な責任があると思われる。聖書の息吹き、神の子としての種子を持つ学生自身が、自己の可能性に信頼し、学ぶことができるような教師のサポートを必要としている。真の神との出会いは、学問的考察を超えた全人格的体験に属することであり、教師と学生との正しい尊敬し合える人間関係なくして体験を分かち合うことはできない。この点で第5因子《教師とのコミュニケーション》が、3年生において最も高くなっていることは、実習でのかかわり合いが大きく影響していることを示唆している。

V まとめ

本学においては、前に述べたように聖書的人間学の哲学的考察に導く人間論、キリスト教概論(1年・2年)、他に聖書研究を行っている。それは、聖書そのものの正しい理解と同時に、現代世界に生きる学生の生活への体験的連携の指導が重要と考えるからである。そこで、イエズス・キリストに対する歴史的神学的知識、聖書の倫理の知識などの要素と同時に、心から神に出会う体験を分かち合えるように教職員が一致して学生とともに歩めるよう努めている。それが、全学生114名という少数の看護教育において、知情意の統合した全人教育をめざすということの意味なのである。

今回聖書的アプローチが、学生にどのように影響しているかを調査し、次のことが明らかになった。

1 聖書的アプローチの効果は、「苦しんでいる人を助けずにはいられない情緒」への動機づけになっている。

2 学生が、自己受容する過程に影響を与えている。つまり、人を大切にすることは、自分も大切にすることを体験を通して、学んでいる。

今後の課題としては、

1 臨死患者あるいは、救急場面などドラマティックな臨床場面における学生の緊張、発達課題、アイデンティティ確立のためのサポートも見落せない側面である。

2 今後2年生の学習に対するなかだるみ傾向の時期、学生の病院の臨床実習環境における教師のあり方、病院における医療チームの人間関係の中での教育等、一層充実した学習環境によって、学生の看護職への適応が容易にされるよう努力したい。そうした援助ができるよう、さらに今回のような研究を続けたいと考えている。

本調査の結果は、同一テーマにおける年度別比較による継続的調査が必要と思われる。

〔資料1〕 看護学生への質問紙

該当するところに○印をつけて下さい。

1. 1年 2. 2年 3. 3年

以下の質問の該当する答に○印をつけて下さい。

1. あなたが知っている大部分の人びとに比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか。
2. あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。
3. あなたは、自分の知っている人びとが、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信していますか。
4. あなたは自分の過誤（ミス）はいつも自分のせいだと感じることがありますか。
5. あなたは自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。
6. あなたは自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。
7. 一般に、あなたは自分のいろいろな能力について自信をもっていますか。
8. あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがありますか。
9. あなたは、自分が他の人びととどのくらいうまくやっているかということについて気にしますか。
10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を気にしますか。
11. あなたは、他の人びとがすでに集って話し合っている部屋に自分一人ではいっていきような場合、気兼ねや不安を覚えますか。
12. あなたは人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。
13. あなたは、クラスや自分の同年代の人びとのグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり不安に思ったりしますか。
14. 他の人びとがみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それに是非勝とうと思っている場合、あなたはとり乱したりまごついたりしますか。
15. 他の人びとから、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になりますか。
16. 人といっしょにいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいいかについて困りますか。
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき、あなたは長くそのことを気にしますか。
18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいですか。

19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。
20. あなたは恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。
21. 自分の意見に同意しない人びとを説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。
22. あなたの友達や知りあいのなかに、あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるときあなたはそのことを気にしますか。
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたは気にしますか。
24. 看護という職業はあなたを生かすものだと思いますか。
25. 病院実習は好きですか。
26. 自己学習活動や実習に関する日報その他の課題はあなたにとって適当な量だと思いますか。
27. 先生とのコミュニケーションに満足していますか。
28. 先生とのコミュニケーションを持っていますか。
29. 学校での友人関係に満足していますか。
30. 学校での相談できる友人はおよそ何人いますか。
31. 学校での相談できる先生がいますか。
32. 看護職に進むことに誇りを感じますか。
33. 大学での専門の勉強は楽しいですか。
34. 聖書のみことばは両親、自分の存在について感謝の念を増させるものですか。
35. 聖書のみことばは看護職に対する「ほこり」を増させるものですか。
36. 聖書のみことばは看護職について専門職である以上に「天職への召命」ということをうらづけますか。
37. 聖書のみことばは医療の複雑な判断を要求される臨床場面で具体的な判断基準の指針となりますか。
38. 朝の祈りは、あなたの1日の始まりに“力”を与えていますか。
39. 夕の祈りは、あなたの1日の終わりに“感謝”を与えていますか。
40. 朝礼に参加することにより、自分に対する感情は肯定的になっていくように思いますか。
41. 聖書は、あなたがケアをする上で指針になりますか。
42. 日常生活の人間関係における問題解決は、聖書が基盤になっていますか。
43. 聖書のみことばによって不安になることがありますか。
44. 聖書に親しむことによって、悩みや葛藤に対する気持は強くなるように思いますか。
45. 聖書によって、友人、教師との人間関係は、日常生活で気になる問題として意識されますか。
46. 聖書に観る人間像と自己像との不一致による葛藤で悩みますか。

注

- (1) Henderson, Virginia, 湯槇ます他訳、『看護の基本となるもの』, 日本看護協会出版会, 1966年。
 - (2) 小林富美栄他, 『現代看護の探求者たち—その人と思想—』, 日本看護協会出版会, 1981年。
 - (3) 新訳聖書, ルカ福音書, 第10章30—37。
 - (4) Nightingale, Florence, *Notes on Nursing*, New York: Dover Publications, Inc, 1969, (湯槇ます他訳, 『看護覚え書』, 現代社, 1968年。)
- この著書は、フローレンス・ナイチンゲールの代表作といわれている。ナイチンゲールによれば、自然に備わった修復過程を妨げないようにするために、換気、きれいな空気や水、清潔さそのもの、および暖かさのようなものを提供することである。生命力を維持し、自分のニーズを満たしうるように患者を助けることが看護の目標にあるとみられる。ナイチンゲールの看護に関する信念は、今日行なわれている看護ケアの基礎的論拠を与えるものである。
- (5) 同上, 213ページ。
 - (6) Rogers, C. R., 伊東博編訳『ロージャズ全集8, パースナリティ理論』, 岩崎学術出版社, 1967年。

- (7) 中西信男他編、『心理学10 自我・自己』, 有斐閣双書, 昭和56年, 200~202ページ。自尊感情 (Self-esteem) とは, 自己概念にともなっているところの価値的な感情であり, 自己をどれだけ価値のある尊敬される人間としてみなしているかの評価である。遠藤 (1974) らは, ジヤニスらの不完全感スケールを翻訳し, 信頼性の検討や項目分析スケールを翻訳し, 信頼性の検討や項目分析など一連の研究を行ない, 23項目よりなる自尊感情尺度 (SE-I 型式) を作成している。
- (8) 高木廣文, 『ナースのための統計学データのとり方, 生かし方』, 医学書院, 1984年, 211~212ページ。
いくつかの変数の背後にある潜在的な因子を探るための方法。実際にデータから共通因子を求める方法はいくつかあるが, 最もよく用いられる手法にバリマックス法がある。因子分析では, 各共通因子の各変数に対する係数を求めることが, 主要な問題となる。共通因子の係数 (重み) は, 一般に (共通) 因子負荷量 (Common factor loading) といわれ, 各変数とその因子の相関係数になっており, この値 (正負にかかわらず) が大きいほど, その因子の効果が大きいことになる。
- (9) 東 洋, 『心理学研究法14 データ解析1』, 東京大学出版会, 1978年, 168 ページ。要因分析を行うとき, 個々のパラメータが, 有意であるかどうかを検定したいということではなく, 一連のパラメータが有意かどうかを問題としなければならない場合のほうが一般的である。
- (10) 同上, 251ページ参照。
項目相互間でカテゴリーを交絡させて度数を調べる集計。
- (11) 柳井晴夫, 岩坪秀一, 『複雑さに挑む科学多変量解析入門』, 講談社, 99ページ参照。
- (12) 高木廣文, 前掲書, 211~212ページ。
- (13) 筒井真優美他, 「看護学生の自尊感情と学習環境に関する調査—私立看護大学生への質問紙による因子分析」『全国看護教育研究学術集会研究発表抄録』, 昭和60年度総会学術集会第35回夏期研究会誌。
- (14) 小島禮子, 「看護学生の職業意識の形成に関する研究」『看護研究』8 巻 1 号, 46~81ページ, 1975年。
- (15) 坂口けさみ他, 「看護短期大学生の生活の実態調査」『東京女子医科大学看護短期大学紀要』第 3 号, 33~43 ページ, 1981年。
- (16) 伊藤暁子他, 「看護学生の生活と看護教育に対する考え方」『看護実践の科学』, 10巻 3 号, 18~42ページ, 1985年。
- (17) 波多野模子他, 「看護学習および看護職に対する態度の発達的变化」『看護教育』, 23巻 8 号, 513~520ページ, 1977年。
- (18) 森田チエ子, 島内節, 「看護学生の臨床実習に対する認識の変容過程と学生・指導者間の認識の関係」『看護教育』, 18巻 9 号, 539~547ページ, 1977年。
- (19) 伊藤暁子他, 前掲書, 26ページ。
- (20) Erikson, Erik, H., 岩瀬庸理訳, 『アイデンティティ—青年と危機—』, 金沢文庫, 1973年。
- (21) Nightingale, Florence, 前掲書, 216~218ページ, 1976年。

参考文献

- Brown, Catherine et al., 南博監訳, 『図説現代の心理学1, パーソナリティ』, 講談社, 1980年。
- Davitz, Lois Jean, 樋口康子訳, 『看護場面の心理プロセス, 事例学習法による展開』, 現代社, 1977年。
- Goble, Frank G., 小口忠彦訳, 『マズローの心理学』, 産業能率短期大学出版部, 1974年。
- 南博, 「自己を知る—自己 自我理論の系譜」『サイコロジー』1: 1, 1980年。
- 中村陽吉, 「自己と他者」『サイコロジー』1: 1, 1980年。
- 中西信男, 「自己と測定」『サイコロジー』, 1: 1, 1980年。
- Roy, Sister Callista, 松木光子, 『ロイ看護論』, メヂカルフレンド社, 1981年。
- Rogers, Carl R., 村山正治編訳, 『ロージャズ全集12 人間論』, 岩崎学術出版社, 1968年。
- Rogers, Carl R., 伊東博編訳, 『ロージャズ全集8 パーソナリティ理論』, 岩崎学術出版社, 1967年。
- Stuart, G. wiscarz & Sundeen, Sandra J., *Psychiatric Nursing*, The C.V. Mosby Company, 1979年。

高木廣文,『ナースのための統計学』,医学書院,1984年。

(わだ さよこ 聖母女子短期大学
たかぎ ひろふみ 聖路加看護大学)

附記

この調査は,聖母女子短期大学筒井真優美講師,沢禮子学長の協力を受けた。この場を借りて感謝を捧げた。
い。